

国際融合文化学会

International Society for Harmony & Combination of Cultures

ISHCC ニュースレター 第9号 (2004.4.22)

モットー：全ての生あるものがその「生」を享受し全うしうる調和を創造すること

国際融合文化学会 (ISHCC) 第七回国内大会 (東京・市ヶ谷) の報告

ISHCC 第七回国内大会が、3月20日(土)(13:00~17:00)と3月21日(日)(9:40~17:00)の両日にわたり、東京・市ヶ谷の日本大学会館204会議室に於いて開催されました。20日はISHCC運営委員の片山博日本大学教授、21日はISHCC事務局次長の木佐貫洋氏の司会進行により、熱のこもった講演・発表・質疑応答がなされ、大盛況の内に終了しました。その内容をご報告いたします。

まず、第一日目は、上田邦義国際融合文化学会会長による基調講演で始まりしました。

上田邦義会長による基調講演：「調和と融合について」(要旨)

東京以外では開催されましたが、東京で二日間学会を開催するのは今回が初めてです。モットーは、いつも楽しく有意義な時間を過ごしたいということです。従いまして、学会という名前ではありませんが、気楽に楽しく、ということです。研究はおおらかに、と言いながら時々厳しいことも言いますが、学会も優しく、しかも、厳しく行います。意義のある、人生は素晴らしかった、ということになる、それに貢献出来るような時間をもちたいと思います。



調和と融合は区別しなくてはならない。以前、私の教えた大学院生の一人が、比較は、ともすると優劣を感じさせるものではないか、と言いました。例えば男性(女性)が、女性(男性)に、他の男性(女性)と比べられることを嫌がる人が多いように、誰もが比べられるのを嫌がるものです。以前、沼津KKRホテルにて会合を行いました。そこで比較文学・比較文化ではなく、文化の優劣ではなく、新たに調和、融合、全ての文化を尊重し、調和をはかる、そういう会を作っていこうという話になりました。それがこの学会を立ち上げる動機です。相手を尊重している間は調和、愛し合えば融合に至る。そしてそこから新しい美や価値が生まれるのです。

学会名を考える時に、融合文化学会という名前は、これから出てくる可能性があるから、ここに国際をつけなければならないのでは、と瀬在総長が提案して下さいました。英語名は、融合にぴったり合う英語がないのでは、ということでしたが、結局、International Society for Harmony & Combination of Cultures としました。

西洋の考え方とは違い、仏教の考え方では、調和、相手にどう合わせるか、ということを考えます。キリスト教で「汝の敵を愛しなさい、汝の隣人を愛しなさい」という言葉がありますが、鈴木大拙氏は「汝の敵、汝の隣人と考えた時点で、仏教の思想と違う」と言いました。仏教ではもともと汝と隣人が一体だと考える

のです。

3Kの法則、即ち、「心・言葉・行動の3つの一致」が大切です。世の中では、結果が大切だ、と言われるますが、私はむしろ結果より目的や意図が大切だと考えます。意図が良ければ良い結果が出るはずで、未来に向かう vision や direction が大切で、何をしたかよりもどちらの方向を目指して生きたか、ということが大事なのです。少しでも世の中に、人類の本当の幸福へ貢献できれば、人生の終わりに、悔いはありません。大往生できると思います。

現実の世界はおよそ私の言うことと違った世界であると、人からも言われることがありますが、皆さんにも私の考え方に共鳴していただいて、素晴らしい世界を作ってほしいと思います。

その後、一人 20 分の持ち時間で、下記の内容で研究が発表され、各発表後に 5 分以内の質疑応答が行なわれました。

童話の誕生の東西 能との関連という視点からの考察

岩淵 恵

文学の一ジャンルである童話が誕生する過程を、能との関連を見ることで明らかにしようと試みたのが本論文である。まず、『星の王子さま』の作者サン・テグジュペリが能を知っていたか、という疑問から研究した。確定はできなかったが、ファンタジーに鎮魂歌の意味もあったという自分なりの発見につながった。ファンタジー作家のエンデは能『谷行』から翻案劇を書いたブレヒトに師事したことがあった。初来日の折に能を觀賞して賞賛しメルヘンを能形式にすることを示唆している。その途上にあったのが『サーカス物語』だが、その後この試みは彼の死により完成されなかった。日本の場合は、児童文学史上の童話創成期の作家で、既に能との関連が研究されている宮澤賢治と同時代の浜田広介を中心に調べた。能の謡いや草双紙のような伝統文学、文化と、英文学、英詩に代表される外来文化が融合した結果、童話が誕生したと考えられる。

コメント：発表者は鋭い感覚で色々発見されて、新しい指摘をする。能楽タイムズを辿って調べるところなど素晴らしい。

コメント：すばらしかった。石川啄木や上田敏も能の影響を受けているようだ。

オーストラリアにおける能の受容

ウォータース 雅代

オーストラリアは、イギリス植民地として建国され、多くの移民を受け入れてきたが、白豪主義、アボリジニ撲滅政策など多くの人種問題をも抱えてきた。しかし今では多文化国家、多民族国家といわれ文化的にも非常に興味深い国の一つである。異文化には寛大な現代オーストラリアで、能はどのように受容されているだろうか。

『能イライザ』は、シドニー大学の音楽科の教授アラン・マレットが、植民地時代に実在したイライザ・フレイザーという人物の伝承をもとに、能にしたものである。作曲は日本在住の能楽研究者リチャード・エマート、振り付けは喜多流の松井彬で、シドニー大学の学生たちも多く参加して、1989年初演上演が行われた。1989年は建国200年を経過した後の年であり、新たな一世紀へと入った時である。『能イライザ』をオーストラリアにおける能の受容を示す物の一つであると考察する。

Q：オーストラリアで能はどう受容されたか

A：オーストラリアでは教材が不足しており、指導者や研究者がいないが、学びたい人は多い。パースの演劇祭では定期的に能や狂言の演者が行き、公演している。

コメント：誰もやったことがない研究をしたので、大変だったと思う。

外国語の速習法及びその教育法

高野 衛東

1. 外国語の速習法及びその教育法の理論は今の社会のニーズに応じている。
2. 国の英語教育方針と目標に当てはまる。
3. 80年代から導入したこの速習法は、数多くの成功例によって科学性と学術的価値のあることが証明されている。

Q：半年以内に外国語を学ぶというのは、どのレベルからどのレベルへ到達するのか。

A：全く話すことが出来ない人なら、例えば“ Good morning. ” から行い、g の発音など CD (録音機) を持ってきてもらい、練習する。半年で 1000 語位の expression が可能になる。自発的な勉強があったかどうか。自信と勇気がつけば、合格。native の言うことの聞き取りができるようになればいい。

コメント：発表者に中国語を習った。(おかげで)今はやる気がある。

仏教思想に基づく『ハムレット』と『リア王』の解釈に関する試論

宗教哲学における異文化間の接点を探る

A Study on *Hamlet* and *King Lear* from a Buddhist Point of View
Common Thoughts in Religious Philosophy Found in Different Cultures

島崎 浩

『ハムレット』と『リア王』に対する仏教思想の観点からの解釈を試みる。『ハムレット』における、死の不可避と人生無常の認識、死に対する心構えの重要性の提示、悪人正機を思わせる国王の姿は、仏教思想からの解釈に馴染む。ただし、他者を死に至らしめることにさほど自責の念を感じないハムレットの言動や、結果的に復讐が遂げられる結末は、殺生を禁じ、恨みを忘れて許すべきことを説く仏教思想とは相容れない。『リア王』のコーディーリアの受難は「代受苦」として、リアの変容は、他者の幸福を願う菩薩行の方向への成長として、仏教思想の観点から解釈可能である。また、登場人物たちにより犯される様々な悪は前世からの宿業によるものであり、エドモンドは最期にその業から脱しようとする兆しを見せた、と解釈可能である。そして、両作品の仏教的解釈を通して、異文化間における宗教哲学の接点、更にはあらゆる宗教哲学における普遍領域の存在の可能性を探る。

Q：浄土教への言及が多いが、禅の要素は？

A：キリスト教の教えは浄土教の教えに共通しているという記述が、仏教とキリスト教の比較を論じる書物にある。

コメント：シェイクスピア作品の例えば『ハムレット』では、今を大切にという禅的考えがあるのでは。

コメント：ハムレットはネガティブな考えをする人物。

『ヴェニスの商人』狂言化の研究

A Study of Kyogen Adaptation of *The Merchant of Venice*

高木 左右

数多くのシェイクスピア劇のなかで、特に喜劇は現代社会の風刺につながるものが多い。そのなかでも、『ヴェニスの商人』は今話題になっている悪徳金貸しの問題を、真っ向から取り上げたものといえる。

私は、『ヴェニスの商人』を日本の伝統芸能、狂言に舞台を移しより簡略に物語の展開を試みた。また、基本としてシェイクスピア劇を知らない人にも解るものとして台本制作をした。それはヨーロッパでもシェイクスピア劇にはない、狂言の様式での舞台であるが世界の人々が楽しく見てもらえる劇を創作したものである。

Q：野村萬斎の狂言では、能楽用と舞台用があるようだが、どこで上演するためのものかを決めているか。

A：能楽堂でできればと思うが、どこでも舞台があれば。

Q：ポーシャが女性に扮するようにしたのはなぜか。

A：男性が女性に扮することが面白いと思った。装束で女性とわかるようにする。

コメント：『ヴェニスの商人』のどこを狂言化したのか。シェイクスピア作品を能化した時にも経験があるが、この場合台詞は『ヴェニスの商人』のままではないだろうか。

永遠についての考察 C.S.Lewisにおける永遠のヴィジョン

中村 恵

この研究は、イギリスの物語作家であり、キリスト教弁証家であるC.S.Lewis(1898-1963)の生涯、エッセイ、作品などを通して「永遠」について考察したものです。通常、時間の延長という意味で用いられる「永遠」ということばが、時間を超えた「存在」としての意味を持っていることに着目し、その永遠の世界がどのようにルイスの作品などに展開されているかを探るものです。

ルイスはキリスト教徒であるため、聖書が示す関連事項を確認することはルイス研究の必須事項とも言えるものです。また、ルイスの特徴として別世界志向が挙げられますが、彼のエッセイに現された事柄の具現化として、彼の想像世界である作品には「永遠のヴィジョン」が豊かに提示されています。この研究によって、現実の枠を超えた世界に私たちの目を向けることができるならば幸いに思います。

Q：発表者は永遠をどう捉えているか。

A：それを知りたくてこの研究をした。はじめと終わりのないものだと思ったが、今は空間としての広がりのあるものだと捉えている。

コメント：大変興味のあるテーマ。知的に書いている。しかし、なぜこれに惹かれたのか、この一節は感動を与えるなどということを書いた方が、よりよい。学問的に知的に書くだけでは物足りない。

コメント：なぜ魅力があるのか、自分は何を言いたいのか、感動したところなどに触れるとよい。(この論文は)抑制して書いている。

『緋文字』における錬金術 「憎しみと反感」から「黄金の愛」へ

高場 純子

ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)の長編作品『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)の中心人物の一人、ロジャー・チリングワース(Roger Chillingworth)は、悪魔的イメージを持つ錬金術師である。しかし一方で、“black art”と呼ばれる彼の錬金術は、奇跡的な癒しをもたらすともいわれる。彼は「醜い雑草」を「効能のある薬」へ変容させるように、他の登場人物たちの内面をより高次な方向へと変容させる。ホーソーンは、「憎しみと反感のたくわえが黄金の愛に変質していく」という一文によって、チリングワースという錬金術師が負の感情をプラスに転化する役割を果たしているだけでなく、負のイメージを持つ彼自身もプラスの意味に転化しようという人間の内面のアイロニカルなあり方を示している。そして、錬金術師チリングワースが「金」や「真実」を追い求める姿は、人間の「生」の根源を追求する作家としてのホーソーンの姿ともいえるのである。

Q：この論文では何を見たいのか。

A：チリングワースは悪魔的でマイナスイメージが多いが、そうではないのではないかと思い、書いた。

チリングワースは被害者でもあるから。

コメント：「ある学者は・・・と言っている」、など通説も用いるべき。

時事英語における副詞の研究 『タイム』誌を中心に

細野 みよ

英語学習者の低年齢化に伴い、学校では話す英語を重視している。しかしそれは初期の学習には向いているが、読む力がないと伸ばすことが出来ない。英語の学習はもはや学生だけに要求されるものではなく、社会人である私達こそ必要なのではないか。

手近に英語で書かれた本、雑誌、新聞等がたくさんある。これらを利用して英語を勉強しながら社会勉強も同時にできる。この研究では『タイム』誌を使いそこに出てくる多くの副詞に注目し、分析してみた。

一般的に副詞はあまり注目されていない。同じ単語がいろいろな位置に生じたり、形容詞に-lyを付けて副詞が出来たりする。

しかし副詞なしの文章は考えられない。副詞の使い方によって文章は豊かになり、ある点を強調したい時はそれにふさわしい副詞を選ぶことも出来る。また文の流れをスムーズにする時も副詞が重要な役割を果たす。副詞を研究することによって読む、書く、そして話す力をつけるのにも役に立つ。教材を時事英語から選んだが、副詞は時事英語だから特殊なものではなく、文学作品にも通じることを確信する。

Q：貴重なご指摘。実際使えるようになるには？

A：副詞を知り、使うことは、多くの単語を使うことになる。

Q：副詞はどのように数えたか。

A：パソコンを使ってではなく、自分で紙に書いて数えた。

世阿弥能楽研究

舞の美学〈移り〉に関する基礎的考察

The Aesthetics of Noh Dance: Chiefly on Transformation from Verse to Dance

川田 基生

(1) 舞の美学

舞の美を構成する要素として、散ってゆくいのちの輝きとしての〈花〉、生成し高揚する〈大きさ〉、自由な精神の〈間〉、間から間へ転移する趣としての〈移り〉の4つがあげられるという。今回はこれらのうち〈移り〉について考察したい。

(2) 世阿弥『花鏡』の〈移り〉

世阿弥は「一声の匂ひより、舞へ移る堺にて妙力有るべし」として〈移り〉を重視する。

(3) 『古今和歌集』の〈移り〉

この〈移り〉に関する日本特有の美学は、既に『古今和歌集』の和歌の配列に見られる。

191 白雲に羽うちかわしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月

192 さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月わたるみゆ

193 月見れば千々にものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど

各々の和歌に世界があるだけでなく、191と192の対比、193への〈移り〉が『古今集』の美の世界を構成している。

(4) 俳諧の連歌の付け合いにおける〈移り〉

芭蕉晩年の俳諧理念を説く服部土芳『三冊子』1702年では、匂、響、おもかげ、推量などを〈移り〉についての要因としている。

上記の諸点の考察から、能の舞への認識を深める試みをしてみたい。

コメント：移りと間はセット。俳句と能にも序破急など共通点が多い。

コメント：移りはそれぞれ（謡いや作品によって）意味が違うと思う。

大学レベル学科教育と文化理解

星野 裕子

高等教育において、特に科学技術系の教育において文化教育は余り時間を割かれていないようである。またたとえ時間を与えられていても、項目羅列的な自文化・他文化の現象の説明に終始していることが多いようである。このような現状は、文化というものの捉え難さ・語り難さから発しており、それゆえ明確な形例えば芸術（文楽・歌舞伎等）、建築（寺院・神殿建築等）、儀式（冠婚葬祭等）のような - を取っているものを文化そのものとして語り、文化というものの本質を問うことが回避されているためではないだろうか？ その様な教育現場の中で、文化現象の存在理由や、現象のその背景文化の中での意味に対する理解や感受性は涵養されているであろうか？

本発表では、工科大学における三教科 語学、外国語による技術レポート作成科目、専門科目 - の中で他文化への感受性・理解の不足が学習成果にどのような影響を与えるかについて検証し、文化理解の重要性を具体的に提示することを試みたい。

Q：ノンヴァーバルコミュニケーションについては？

A：私はアメリカで言葉が少なかったが「表情と態度で理解しやすかった」と言われたので、ノンヴァーバルコミュニケーションが大切だと実感している。

茶の湯の逸話の一考察

A Study of Stories About *Chanoyu*

安田 保

茶の湯にまつわる逸話は数多く伝えられている。それら逸話に込められたメッセージを読み解き、侘び茶の美意識、精神についてを考察する。

Q：お茶の起源は？

A：中国で始まり、鎌倉時代に栄西が日本に持ち込み、禅宗で修業の一環として始められたといわれている。

Q：茶の湯の普遍性とは？

A：茶の湯は手段。辿りつくところは自他の区別をなくして他人を思いやること。西洋東洋の分け隔てなく普遍的なことだ。

Q：魏志倭人伝のころの茶は中国でも高価であったときいているが、日本では一般的に飲まれていたのか？

A：利休のころは一般人はまだ飲めなかった。お茶を飲むより、水を飲んでいただけといわれている。

Q：お茶の作法とキリスト教の作法に相互影響があったか？

A：キリスト教の作法と共通点がある。例えば同じ茶碗を使うこと、ふくさをを用いること、など。広めようという目的が同じなのではないか。

W.B. イェイツに関する一研究 能との出会いについて

A Study of W.B. Yeats On his Encounter with NOH

田口 裕基

私は今から90年近くも前に、日本人でもないのに能に興味を持ったイェイツについて研究した。彼がどのようにして能に出会い、そして能を基に『鷹の井戸』を創っていったのかについて調べた。さらにそれを踏まえた上で、自分の体験や世阿弥の伝書の考えを織り交ぜながら私の考えをまとめた。なお、これは修士論文として提出したものであり、イェイツについては今後も継続研究していくつもりである。

もう少し具体的には、第1章ではイェイツが能と出会う上で、重要な役割を果たしたフェノロサ、パウンド、伊藤道郎を中心に上げそれぞれの相関関係を論考し、いかにしてイェイツが能と出会ったかを考察した。第2章ではイェイツが『鷹の井戸』を創る上で、能の影響がどのように出ているかについて、イェイツの能の知識を論考した上で考察した。第3章では『鷹の井戸』が発表された頃のアイルランドの時代背景を論考し、それが作風に与えた影響、そして戯曲としての見地からこの作品を考察した。第4章では『鷹の井戸』が発表されて以降、アイルランドから日本へ逆輸入されそれがさらに『鷹の泉』や『鷹姫』など能に翻案された事実から、それが単にアイルランドと日本の文化交流だけでなく、世界中に日本の能を広める役割を果たしてきた点について考察した。そして私自身の英語能の地謡の体験を織り交ぜて、英語能の目的の一つである国際的な文化の融合についても考察すると共にイェイツの業績との共通点について論考した。最後にイェイツの『鷹の井戸』によって能の世界が日本でも広がった事から、残るべき価値のある伝統文化は、いつの時代になっても他の文化を吸収したり、他の文化に影響を与えたりしながらも次の時代に残っていくものであると結論づけた。

Q：『鷹の井戸』の話とは？

A：不老不死の水を求めて出ない水を待っている老人。50年も待ち続けている。若者がやってきて井戸の水を奪おうとする。最終的には二人とも仲良くなるというお話。

Q：イェイツが文化交流のない日本の能に出会って感銘を受けたのはなぜだと思うか？

A：集合的無意識が同じだったのではないか。

Q：イエーツはフェノロサの英訳を読んだのか？

A：フェノロサは日本の能を英訳している間に亡くなりそれをパウンドが引き継いだ。その後イエーツがそれを目にして感動したといわれている。

Q：イエーツ以前に欧米人が能を見ていた可能性はあるか？

A：織田信長時代に宣教師などが能を実際に見ている。そういう資料がある。

コメント：英語で能をやるということは外国人が気軽に来ることができるので能を世界に広めるにはいいものだ。

ゴンザーローの理想社会 『テンペスト』の一考察

A Study of *The Tempest*, Gonzalo's Ideal Commonwealth

菊地 善太

ゴンザーローの語る理想社会は、人間が仕事をする事も学問をする事もなく、従って身分の差も貧富の差も争い事もなく、ただ無垢な心で自然と共生する世界である。

17世紀初頭、シェイクスピアにとっては単に現実世界を否定した世界を語る話ではなく、新大陸に夢を馳せ、そしてアダムとイヴの楽園に心を寄せてゴンザーローに語らせた言葉ではなかったか。ロックやルソーが自然状態や社会契約を考えるよりも昔に、シェイクスピアがゴンザーローに語らせた世界を考察したい。

コメント：児童文学、C.S.ルイスの『ナルニア国年代記物語』の第3巻とそっくりの話である。

Q：最後に弟が土地を返して・・・という部分はこの研究に入らないのではないか？

A：最後の場面で戻る運びにはなるが、本当に戻ったかどうかは書かれていない。

Q：発表者にとって自然とは？

A：自然にはいろいろな側面があり、人間が動物を束縛しているのは事実だが、人間の知恵をもって共に共存していくのがいいと思う。

ボディワーク・セラピーとしての能

Noh, as a Bodywork Therapy

宮西 ナオ子

世界に分布するボディワーク・セラピー。起源となる場所はアメリカ、ヨーロッパ、中近東、インド、チベット、モンゴル、中国、日本である。まず最も古いのがヨーロッパとインド。ヨーロッパの場合は、古代ギリシャのヒポクラテスからカバラへと進化し、それが中世では錬金術になる。16世紀に入ると、メスメルとパラケルススが注目される。また19世紀にはスウェーデン・マッサージへと進んでいく。一方インドも起源は古く、アーユルヴェーダ、タントラ、ラージャ・ヨーガからハタ・ヨーガ、インテグラル・ヨーガへと成長していく。中近東では6世紀のスーフィズムの影響で、これがヨーロッパに流れると、グリジェフ・ムーブメント、オイリュトミー、アレクサンダー・テクニクとなる。アレクサンダー・テクニクはチベットから発祥したチベット医学の影響を受けているのである。このチベット医学とインドのヨーガの合体から、和尚のダイナミック瞑想法などが生まれる。中国では気功や導引、仙道や道教、伝統医学が統合し、12世紀には太極拳が生まれて、これにインドのインテグラル・ヨーガが合体する。これが後に、MART、新体道、野口体操、真向法、自彊術などの祖となるといってよい、これらは太極拳に加え、禅や仏教、古神道などが合体したものである。米国ではシャーマニズムから入り、1950年代になって、グルジェフ・ワークが取り入れられ、アリカ・トレーニングが発展してエサレン研究所の流れに入る。エサレン研究所では、プレス・セラピーを行ない、ホロトロピック・セラピー・リバーシングを行なうことに加え、ネオ・シャーマニズムとしてのヒーリングアーツ・ボディ・セラピーを行なう流れと、トランスパーソナル系に向かう流れに別れてい

った。ヨーロッパから発祥したムーブメントは、ホリスティックな動きに向かい、センサリー・インテグレーション、インテグレイティブ・ムーブメントセラピー、ダンス・セラピーなどに向かう。このような流れのなかで、能における仕舞と謡がボディワーク・セラピーとしての要素をもつことに着目し、検証していく。

Q：古武術、剣道などでのすり足との関連はあるのか？

A：柔道、お茶にもすり足がある。すり足は上下動しないで動くための技である。安定した形で重心を動かすことで自然に進むようになっており、きちんと理論的になっている。

Q：太極拳は古武道と違って筋肉を鍛えない。分類したほうがよいのではないか。

A：そうですね。ボディーワークも筋肉を鍛えない。

Q：それぞれの方法が有効であっても、互いには悪影響を与えるということはないのか？

A：健康法で最も大切なのは、本人の意識。どのように生きたいかということ。ストレスが病気の原因になることが多い。そのストレスも自分の意識で変えられる。

エドワード・W. サイドにおける異文化遭遇

The Encounter with Strange World in Edward W. Said

後藤 隆浩

歴史的存在となったサイドは、20世紀後半の現代思想における最重要思想家の一人として、今後も研究され続けていくであろう。

サイドが初期にジョウゼフ・コンラッド研究を行ったことには、彼自身の経歴を考えれば、強い必然性があるものと思われる。

サイド思想の基調形成に影響したであろう異文化遭遇のイメージを、コンラッドのテキストとの照応関係から考察する。

Q：ポーランド語と英語の間で、英語への言語上の異文化ショックは感じられるか？

A：最後に母国語でうわごとを言うと、妻が恐怖をおぼえて去っていくところなどに感じられる。

言葉の響きのリズムの違いからうっとりしたりショックを受けたりすることがある。

『柳橋新誌』の世界

A Study of *Ryuukyoushinshi*

具島 美佐子

私は以前、卒論で『永井荷風研究』を提出したが、荷風文学の原点を考えるうちに、成島柳北に関心をもつようになった。柳北は若き日の荷風が傾倒した人物である。幕臣であった柳北は維新後、ジャーナリストとして健全な言論活動を展開させた。また柳北は儒学と洋学を学んだ幅広い視野の持主で、代表作『柳橋新誌』には幕末から明治にかけての人間社会がリアルに投影されており、時代の過渡期における人間と文学の関わりを考える上で貴重な作品である。

『柳橋新誌』の世界を探求すると、柳北が花街を背景として維新政府の本質を描き、文明開化の裏側を批判しながら、人間性への開眼を主張していることが理解できた。さらにその点を掘り下げた結果、日本の江戸期の漢文学と中国大陸の文学、特に『板橋雑記』を中心に、晋の陶淵明から清の袁枚の頃までとの関わりを調査研究する必要があることを痛感した。未だ勉強不足ではあるが、これを出発点に今後の研究を深化させたいと考えている。

Q：柳北の文明批評家としての立場は？

A：西洋精神を肯定する立場かと考えていたが、反文明開化の立場である。『柳橋新誌』の二編の中に日本の文明開化に対する批評が書かれている。明治政府のうわべだけの文明開化に鋭い批判をしている。

コメント：日本という世界の中で考えるのではなく、中国、広くはベトナムまでを含めて日本文学を考える必要がある。「漢文学の役割」がこれから重要な課題になってくるかと思われる。

シェイクスピアと狂言の間で

Shakespeare a la Kyogen or Kyogen a la Shakespeare?

南 隆太

『まちがいの狂言』を例に、翻案上演においてはシェイクスピア作品と同様に伝統演劇もまた書き換えられることを確認し、我々がシェイクスピア翻訳(Shakespearean adaptations)という時の Shakespearean とは何を意味するのかを考える。

Q：スタンフォード大学での学会 Shakespeare in Asia でもこの話をする予定か？

A：ハンドアウトはこれを英語にして作ったが、内容は多少変えるつもりである。

秘教研究を通しての文化融合の可能性

神尾 学

「一芸に秀でるものは諸芸に通ず」という言葉があるが、確かに様々な分野の超一流の人々は、ある点において非常に近似した認識に到達しているようである。「悟りにいたる道は多数あり、途中で見える景色には違いがあるが、頂上は1点である」というような趣旨の話もよく耳にする。

世界各地に残る秘教は、その“頂上”の様子を伝えるものであり、中でも神智学～トランス・ヒマラヤ密教と呼ばれる教えは、論理的体系性において抜きん出たものといえよう。その内容は、素粒子よりもさらに極微の世界から日常生活空間をへて極大の宇宙まで、また至高の神＝霊的な世界から人間的な意識をへて唯物的な世界まですべてを包含し、さらに現代科学等によって明らかになってきた最先端の情報とも符号するものである。したがって、秘教の真偽を検証しつつ現代科学等との融合を図ることは、融合文化研究においても非常に重要な課題であるように思われる。

Q：ブラヴァツキー夫人はどのくらい前の人物か？

A：130年くらい前の人。

コメント：ユングは神智学も学んだが、晩年「わたしは神智学者ではない」といった。シュタイナーは神智学協会に属していたこともあるが、人間に近い部分で人智学の進んだ実践がある。

大会二日目、3月21日(日)の研究発表終了後、大学時代からの親友であられる上田邦義会長によるユーモアを交えた温かい紹介の後、岡本靖正(前東京学芸大学学長・ISHCC 顧問)氏により、特別講演「シェイクスピア能と融合文化」が行なわれました。

岡本靖正 ISHCC 顧問による特別講演：「シェイクスピア能と融合文化」(要旨)

日本人は大和ことばを持っていた民族である。しかし、日本固有の文字を持っていなかったために、文字は中国に学んだ。その後、万葉がな、カタカナ、ひらがなが作られ、かな交じりで書くようになったが、中国との文化の融合が起こった。イギリスでも、1066年のノルマンコンクエストで、北と南の文化が融合したといえる。日本では、その後も、キリシタン文化、鎖国時代のオランダ、幕末以後はアメリカ、ヨーロッパから、文化が次々と入ってきた。ゆえに、自分の思考力、感性のどこからどこまでが日本的なのかを分析する自信がない。また、一種のコスモポリタンであると否定できないようでもあり、反発を感じるようでもある。自分自身のアイデンティティの曖昧さはぬぐいきれない。

明治に入って、欧米の文化を文学などのジャンルに分けず、全てひっくるめて取り入れようとした。さらに、55年から65年にかけての高度成長期には、あらゆるものは細分化されるようになった。福原麟太郎は「文学は国境を越えられるか」を絶えず考えていた。融合文化・融合への試みを企てる一方で、文化の融合はあり得るのかを考えることが大切である。融合の努力を通して国境を越えられるか、ということである。



ヨーロッパ的なシェイクスピアの作品を、上田先生はどのようにして禅的な日本の世界、能にしているのか。ヨーロッパ的ドラマが終わったところから能が始まることを考えると、上田先生の『英語能・ハムレット』では、オフィーリアの死を巧みに処理している。ハムレットを能的な世界に変換するためには、禅的な世界を創出する必要がある。To be or not to be is no longer the question. はたいへん禅的であり、これがあることによって、『ハムレット』が禅的な『英語能・ハムレット』の世界に変換されている。英語での謡と舞の様式にのせ、能の間を生かすためには、原作テキストを一度解体して、テキストを少なくして、コラージュ風に再構築する必要がある。ハムレットの心境の変化については、シェイクスピアの原作の中でも、ハムレットが舞台上から一旦姿を消して、イギリスへ渡った後帰国して再登場する墓堀の場面で、劇自体の中でハムレットの変化が存在しており、『英語能・ハムレット』において、禅的に能化する根拠があるのではないか。

提言：無名の旅の僧をワキに設定できないか。

外国でも英語能の上演を続けてほしい。

専門の能楽師により、日本の能の演目の一つとしてプログラムに載せる形で、日本語のテキストでの上演もしてほしい。

その後、*Abridged NOH HAMLET in English* とシェイクスピアの原作とを対照させて、『英語能・ハムレット』創作に関する詳細な分析と、上田先生に対するご質問がなされ、和やかな雰囲気の中で上田先生がお答えになり、創作の過程の一端に触れる貴重な機会を得ることができました。

『英語能・ハムレット』堺公演のお知らせ

『英語能・ハムレット』

【原作】ウィリアム・シェイクスピア

【能本・曲節作者】上田（宗片）邦義

【企画】ISHCC 学会・大和座徳平企画

【入場料】3千円【日時】平成16年5月24日（月）25日（火）14時～16時

【場所】堺能楽会館：大阪府堺市大浜北町3丁4-7-100 ダイトクビル

【連絡先】大澤徳平、：072-238-2000、E-mail:otokuhei@jasmine.ocn.ne.jp

学会誌『融合文化研究』第4号の投稿論文を募集します

当学会の学会誌『融合文化研究』の第4号の投稿論文を募集いたします。8月末締め切りで、10月に発行予定です。募集要項については、当会のホームページ

(<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ISHCC/index.html>)にて、常に最新の募集要項を案内しております。時々ホームページをチェックしていただければ幸いです。

また、当該年度の学会誌については、その年度の会費を納入いただいている会員の皆様にお届けしたいと考えております。まだ会員になられていない方、或いは会費を未納入の方は、この機会にご入会、ご納入いただけるよう、お願い申し上げます。

以下、『融合文化研究』への投稿論文募集要項です。

国際融合文化学会（ISHCC）『融合文化研究』原稿募集要項

編集規定

1. 会員の国際融合文化に関わる研究論文の発表の場として、学会機関誌を創刊し、以降原則として年2回発行していくものとする。学会機関誌の名称は『融合文化研究』とする。
2. 投稿の資格は、投稿時点で、その年度の会費を納入している国際融合文化学会の会員に限る。
3. 原則として年に2回論文を募集する。募集期間については都度、学会事務局（または編集委員会）より連絡するものとする。
4. 応募論文は融合文化に関連するテーマであることが望まれる。応募論文は学会誌等に未発表の論文であること。但し、口頭発表済だが学会誌等に論文投稿していないものについては、その旨明記していれば審査の対象となり得る。
5. 原稿の採択および掲載順は、審査委員会（編集委員会が兼ねる）で査読の上、決定する。
6. 原稿の採択が決まった執筆者からは、学会機関誌発行にかかる費用の一部を、執筆者負担金として徴収する。写真印刷が必要な場合は、執筆者の負担として、別途必要な費用を徴収する。執筆者負担金の金額は、2ページにつき1,000円とする。ただし、ページ数の算定は執筆規定の1による。
7. 執筆者には『融合文化研究』5冊を贈呈する。また、希望者には抜刷りの印刷にも応じる。抜刷り印刷にかかる費用は、別途申込者から必要な費用を徴収する。
8. 投稿論文は返還しない。

執筆規定

1. 原稿の書式 Microsoft Word を使って原則として横書きで作成すること。
B5判 横書き 40字 30行 10.5ポイント 4ページ以上、12ページ以内(タイトル、注、図版等すべてを含めて) ただし、ページ数が奇数となった場合は、編集者が空白のページを加え、偶数とする。5ページなら6ページとなる。
余白(上25mm 下20mm 右20mm 左20mm ヘッダー12mm フッター10mm)
本文のフォントは、和文はMS明朝、英文はCenturyとする。英字と2桁以上の数字は半角で入力すること。
2. 和文タイトルには、英訳を付けること。英文タイトルには、和訳を付けること。
タイトルのフォントは、和文はMSゴシック 14ポイント、英文フォントはCentury Gothic 14ポイントとする。1行あけて氏名(MSゴシック 12ポイント)、英文氏名(Century Gothic 12ポイント)
3. 和文論文には英文の要旨を付けること。英文論文には和文の要旨を付けること。要旨は7~8行とする。要旨は氏名から2行改行、2行改行して本文を始める。
4. 和文タイトルの後、改行して英文タイトルを入れ、1行あけて和文氏名を入れ、改行して英文氏名を入れ、2行あけて英文要旨を入れ、2行あけて本文を書き出すこと。英文論文は和文と英文に順序を逆にする。英文氏名の姓はUEDA Kuniyoshiの形式とする。
5. 原則として、提出された原稿をそのまま版下とし、校正は行わない。編集委員会でページ付けと書式の統一を行う。
6. 原則としてE-mailの添付ファイルで提出すること。画像等を含んだファイルでサイズが大きいときは、CD-RまたはMOで提出すること。提出されたCD-RまたはMOは返還しない。
7. 執筆希望者はあらかじめサンプルファイルを下記よりダウンロードして参考にすることが望ましい。
<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ISHCC/wanted/>
8. 本稿に規定されていないことは、『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』に準ずる。

《問合せ先》本件についてのお問い合わせは、下記にお願いいたします。

ISHCC 実行委員

竹村 茂 2000c14@gssc.nihon-u.ac.jp

菊地善太 2001c03@gssc.nihon-u.ac.jp

国際融合文化学会理事・名誉会員・役員のご紹介（敬称略・順不同）

《学会理事、名誉会員》

瀬在 幸安	名誉会長				
秋山 正幸	顧問	岡本 靖正	顧問	日江井 榮二郎	顧問
福田 陸太郎	顧問	Doljintseren, Badam-Ochiryin		顧問	
池田 憲彦	参与	加藤 義喜	参与		
奥村富久子	名誉会員	観世 榮夫	名誉会員	田口 和夫	名誉会員
津村 禮次郎	名誉会員	野村 万作	名誉会員	毛利 三彌	名誉会員
Adiya Yumdal	名誉会員	Dorj Daicha	名誉会員		
山波 言太郎	名誉会員				

《学会役員、事務局役員》

上田 邦義	会長				
寺崎 隆行	副会長	Marcus Grandon	副会長		
菊地 善太	事務局長				
木佐貫 洋	事務局次長	竹内 正人	事務局次長	棚田 茂	事務局次長
竹村 茂	事務局次長	安田 保	事務局次長	島崎 浩	事務局次長
戸村 知子	実行委員	宮西 直子	実行委員		
田口 裕基	実行委員	玉置 知彦	実行委員		

《会計監査、運営委員》

渡辺 直	会計監査				
荒木 正純	運営委員	岡田 恒雄	運営委員	小田切 文洋	運営委員
片山 博	運営委員	河嶋 孝	運営委員	後藤 隆浩	運営委員
高山 茂	運営委員	永岡 健右	運営委員	藤澤 全	運営委員
前田 禮子	運営委員	真邊 一近	運営委員	宮本 晃	運営委員
山田 正雄	運営委員	南 隆太	運営委員		

終身会員のご報告

当学会の趣旨に賛同して終身会員になってくださる方が増えてきております。

下記に、2004年4月1日現在の終身会員の皆様のご氏名を公表致します。（順不同）

坂本典子様、石井洋子様、西岡妙子様、三輪京子様、片山博様、
 高橋明美様、吉田友明様、竹内正人様、今清水功様、菊地善太様、
 上田邦義様、情野瑞穂様、井手美弥子様、安田保様、花岡真由美様、
 宮西ナオ子様、棚田茂様、井上英明様、川田基生様、斉藤美紀様、
 戸村知子様、星野裕子様、高木左右様、松添寛之様、渡辺治則様、
 深堀真理子様

終身会員の皆様、役員の皆様、そして年会員の皆様、今後とも色々のご意見やご提案を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

【会費のご納入について】

ご協力いただける方は、下記の郵貯口座へのお振込みをお願い申し上げます。

口座番号：00120-1-550305 口座名義：ISHCC

年会費 一般会員：3,000円、学生会員：2,000円

或いは、終身会員：30,000円（次年度以降、会費支払い免除）

2002年度の国際融合文化学会収支報告は以下の通りです

2002年度 国際融合文化学会 収支報告

学会収入				
前期繰越金	¥402,151			
学会費等徴収	¥791,000	内訳		金額
		終身会員費 ¥30,000	9	¥270,000
		年会費(繰越金含む)	46	¥156,000
		(一般¥3,000 学生¥2,000)		
		寄付金	4	¥310,000
		学会誌執筆者負担金	11	¥55,000
大会費徴収	¥425,200			
		内訳		金額
		10月堺公演出演料		¥100,000
		(英語能公演)		
		10月堺大会	22	¥155,000
		3月東京大会	29	¥170,200
収入合計	¥1,618,351			
学会支出				
大会費支出	¥752,985			
		内訳		金額
		10月堺公演		¥382,800
		10月堺大会		¥188,582
		3月東京大会		¥181,603
学会誌支出	¥123,874	印刷代、郵送料、他		¥123,874
事務諸経費	¥28,175	会報等郵送料、名刺代		¥28,175
来期繰越金	¥713,317	2003年度への繰越金		¥713,317
支出合計	¥1,618,351			

以上の通り報告します。

2003年7月12日

会計係

菊地善太

編集後記

『ニューズレター』第9号編集委員代表、事務局の島崎浩です。前号までの編集長、菊地善太事務局長から大役を引き継ぎまして、今回は、学生会員の畑江美佳さん、若尾明余さん、齋藤光代さん、安藤美奈子さんに編集委員になっていただき、学会の内容の取材をお願いし、それをもとにして、全体を編集いたしました。

また、同じく学生会員の渡部英雄さんに撮影していただいた写真を掲載させていただきました。編集委員の皆様と渡部さんにはこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。

なお、『ニューズレター』第9号につきまして、何か不備な点、至らぬ点がありましたらどうぞご指摘くださるようお願いいたします。

事務局の竹村茂さんが作成・運営して下さっている当会のホームページも是非ご覧ください。

(<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ISHCC/index.html>)

今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

『ニューズレター』第9号編集委員代表 島崎 浩